

集落活動の社会教育的意義に関する研究（上）

—内間青年会の字実践、担い手のライフヒストリー分析を中心に—

小林 平 造〔鹿児島大学教育学部(地域社会教育)〕

A Study for the Lifelong Educational Significance of a Community Practice in Okinawa —Community Practice of the “Utima Seinenkai”(a young Men’s Association); of Utima Town Urasoe City Okinawa Prefecture, and Analysis of the Supporter by the Life History Method—(The First Part)

KOBAYASHI Heizou

キーワード：青年、自立、沖縄の集落、ライフヒストリー

はじめに

主題に直接関わる研究は、次の2つを行ってきた。1つは、名護市宇屋部の芸能とまつりに着目し、芸の伝承や熟達にみられる人々の成長や発達の事実の構造を解明した研究である。そこでは、集落に存在している人々の「年齢階梯」の持っている意義に注目した（TOAFAEC東京・沖縄・東アジア社会教育研究会『東アジア社会教育研究』No.5 2000年9月）。2つは、読谷村における①字誌づくり（字楚辺）、②集落公民館づくり（字大添）、③字の子ども文庫づくりと芸能にとりくむ子ども会、それらをとりにくむ人物（30～50歳代）のライフヒストリー分析である（2001年度九州教育学会、他で報告）。

浦添市内間青年会の調査と研究は以上の調査研究をふまえてとりこんできたものである。ここでの研究対象は、一集落における青年会の「字実践」と担い手の青年たちである。研究方法は、ライフヒストリー分析による。その検討課題は、今日の沖縄のシマ社会における青年の諸実践が持っている青年個々の自己形成や自立にとっての意義の解明である。

I. 内間青年会と青年の生活世界、3人のインフォーマント

1. 「字実践」概念と内間青年会（浦添市）への着目

「字実践」という概念は、字における生活と自

治、そこで営まれる芸能、文化、教育、スポーツ、余暇活動などの総体をさす。とりわけ字における自治と学びに注目した概念としておきたい。特に重要な点は、字におけるこれらの要素が、民衆のためのものとして機能していくために、字の人々の手によって復活させられ、維持され、あるいは改革されてきたという背景を持つことである（拙稿「沖縄における集落公民館の自治と運営論に関する歴史実証研究」同上『東アジア社会教育研究』No.5）。そして同時に、民衆的な自治と生活と学びの知恵や技を伝統的に継承し維持してきたということである。「字実践」は、このような側面を持つ字の歴史を背景として、現在の字を現代的で意味あるものにしていくという意図を何らかのかたちで持つ多様な実践を指している。報告でとりあげる内間青年会のとりにくみも、今日の青年による「字実践」の典型事例である。

浦添市（人口約11万人）字内間（人口約9300人）は¹⁾、県庁所在地の那覇市に隣接する大都市地域である。内間青年会は、1970年代に消滅していたものが、1992年に再結成され、一つの字で100名を大きく超えるメンバーを擁する青年会に成長した字の青年組織である。字青年会の存在は、浦添市においてめずらしいことではないが、次の点が注目される。①大都市地域において、②11年前に再結成して今日まで発展しながら活動を展開し、③この青年会が「内間のエイサー」や芸能を復活させ、盆行事の「エイサー道ジュネー」

や「ガーエー（我栄：各字エイサーの、路上での競演）」、そして「内間の大綱引き」等を復活させてきたこと、④さらに、青年会規約の第2番目の目的として「青少年の健全育成」を掲げて、子どもエイサー指導や生活指導などを通して、社会課題となってきた地域における子育て事業の大きな担い手となってきたことである。それは、大都市型地域の字において、青年が主役となり、芸能やまつりを媒介として、今日の、地域づくりを行った実践として典型的な存在とっていい。このとりくみを担ってきた青年たちの自己形成と自立の在り様において、このとりくみがいかなる意味を持ってきたのか、大きな関心が寄せられてきたところである。

2. 21世紀日本の青年問題と沖縄・内間青年会における青年の生活世界の検討

今日、グローバル化する国際社会において、地域社会教育と労働・職業教育の統合的な発展を展望することは、世界的な実践課題であるといっている。しかし日本においては、青年の社会的自立を支える地域社会のしくみが失われ、若者の生きがい観の形成が困難になっている。

内間青年会のとりくみがこの課題にこたえてきたことは、既に指摘した。その際、この青年たちが対峙してきた問題は、字を含めた地域コミュニティの崩壊現象と子どもの成育環境の崩壊現象である。また、低学力や「落ちこぼれ」、「いじめ」などを要因として、学校教育からスポイルされる子どもや青年の問題である。さらには、高校卒業後の就職難やフリーター、非就労状態の問題、自暴自棄に、そして非行や逃避にさいなまれる青年の問題であり、親の離婚や暴力などを原因とする家庭崩壊現象である。

ここで明らかにしようとしていることは、内間青年会を構成する青年達にとって、青年会の「人間関係と場（内間公民館の地階、青年室）」が、個々人の青年期の自立（自律）にとっていかなる意味を持っているかということである。すなわち、彼らの「生活世界における意味」（ガストン・ピノとルグラン、末本誠が2003年9月、日本社会教育学会研究大会報告「19世紀フランスの成

人講座と労働者—生活史研究の観点から—」で紹介している）の解明である。それをもとに、彼らの「生活世界における意味の構築」（同上）を展望できればと考えている。

そこで、「青年の自立（自律）」を、経済的自立、社会的自立（生きる場とアイデンティティ）、精神的自立（規範の確立）の3要素からとらえ、個々のライフヒストリーから、自立の3要素がどのように獲得されていくのか、を分析していくこととする。

中心的な登場人物は、K氏（現在40歳）とした。なぜならKは、①内間青年会を11年前に作り出し、この組織の基礎と内実を創造してきた人物であり、②後に沖縄県青年団協議会（以下「沖青協」と略称）の常任理事（1年）、会長（1年）をつとめているが、今日まで一貫して内間青年会に大きな影響力を持ち、字のとりくみを展開してきた人物だからである。また③内間青年会にとってKは、その象徴的な人物であり、青年たちの理念型（Idealtypus）でもあるからである。④その年齢も、青年期（ないしヤングアダルト）を総括するにふさわしいといえる。このKの生活史分析を柱にして、Kにとっての生活世界の分析を深めていくが、生活世界の意味のポイントごとに、数名の青年に（ここでは、彼らについての分析は断片的になるが）登場してもらい、横断的な分析を重ねることとする。

なお、生活史研究は、「個人的なその時その時の事実を基にした、意味の発見と構築」（ガストン・ピノとルグラン）をめざす。したがって、「自伝とは異なり、他者の存在を介した客観性を担保したものでなければならない」（末本誠「同前」）。この意味で、筆者は、かつてKが沖青協や内間青年会の主要な担い手として活躍していた時の沖青協助言者であり、筆者自身がKのその後の人生や成長の姿をずっと見つめ、語り合ってきた存在であること（ラポールの獲得）、したがってこの考察には筆者の助言者としての立場（現在は、むしろ友人的存在である）と考察が介在していることを指摘しておこう。

ここに登場するA子（28歳）とT（25歳）など、内間青年会の個々人と筆者との関係はK氏を

介在し、彼の場合と同様の関係がつくられている。

3. K氏（40歳）とA子（28歳）、T（25歳）の生活歴

1) Kの生活歴は、資料1参照。内間生まれの内間そだち。最低の成績で入学したという高校を卒業して後、大阪に出て、調理師免許を取得。6年半後に内間で、内間青年会を発足させた生みの親である。内間では、それまでの20年ほど青年会は空白状態であった。現在にいたる内間青年会の基礎は、すべてKが関わって作りだしたものである。したがって、現在でも、内間青年会の青年たちにとってKは、尊敬できる、たよれる存在となっている。

ところで、24歳半ばに帰郷し、内間青年会を再発足させてからの約10年間は、調理師としての自立をめざすが思うようにならず、苦労を重ねる。苦労を重ねたというよりも、実態としては、職業面での自立を曖昧にして、地域の青年会活動にのめりこんでいたというべきだろう。居心地のいいところで、必死なとりくみはしていたものの、要は「甘え」のうえに成り立っていた活動でもあった。「今やるべきことは、違うだろう。このままでどうするの?」と、妻は問いかけていたという。

苦労をしたのは、むしろ、妻と子どもたちである。その間は、妻と親からの援助が経済的な支えであった。そして、この10年間こそが、字内間と内間青年会にとって「青年による地域づくり」が展開した10年間でもあった。

今では、経営のしっかりした飲食店の調理師として、また経営者陣として、自立した職業生活をおくっている。内間青年会にとっても、これまで同様に一貫して、すぐれた相談相手であることもまぎれもない事実である。Kの生活史においては、①青年会創設の経緯はもちろんのこと、②この職業における自立、経済的自立への意志と力量がどこで形成されたのかが注目されるところである。

2) A子は、内間出身の父と東風平村出身の母の

もとに内間で生まれて育った。内間青年会発足当初からの会員で、Kと共に発足時に関わった二人の女性に引き連れられながら（通称「金魚のフン」みたいに）成長してきた人物。20歳の時が入会して4年目で、内間青年会の会計を担当。以後、事務局長、副会長などをつとめた。高校生の時に入会し、女子短期大学をへて、N児童センター職員（児童厚生員・嘱託）として1年間、W児童センター職員として3年間勤務している。21歳の冬に会長をつとめたA氏と交際をはじめ、25歳で結婚。現在、3歳、2歳、8ヶ月児の3人の息子をもうけ、育児に専念している。生粋の内間人（ウチマンチュー）である。

3) Tは、埼玉県草加市生まれ。父は与那国島出身、母（生みの親）は熊本の出身である。しかし離婚。父は、この後にも、二度目の離婚をしている。3歳の時に両親が離婚し父親と共に沖縄へ移動。那覇市首里の祖父母宅に同居する。幼稚園児（6歳）の頃内間へ引越し、中学3年生の時に一時浦添市字宮城に移る。現在は、内間に在住。

内間小学校卒、神森中学校卒で、工業高校電気科を中退。現在はフリーター。高校2年の時に発足2年目の内間青年会に入会。21歳の時、一時渡嘉敷島に住み、生コン会社で仕事をしながらエイサーを指導した経験をもつ。

二度の離婚によって家庭を壊した父への恨みもあるが、高校中退し前向きな生き方ができずに逃避し、酒を飲み、非行を経験する。そこから救い出して、内間青年会でのエイサーの魅力にひきつけてくれたのは、内間青年会発足当初からのM（Kの親友）たちであった。内間青年会とエイサーに救われたような人物である。そして、エイサーと内間青年会を通じて前向きな人生観を獲得。現在は副会長をつとめる。

就労という点では、Kと同様に問題を抱える。この問題については、おそらく本人も、その重さに気づいていないだろう。Kになぞらえれば、25歳では、まだその重みの本当の意味が、彼のなかでとらえきれていないのだ。

「スクールガード」は、浦添市の青年就労対策であり、また神森中学校での暴行事件（2002年4月、03年2月に発生）に対する対応策として生まれた制度である。Tはこの「スクールガード」に就労（1人半年間を限度として就労する規定）して、「問題児（といわれる）」に寄り添う指導・エイサー指導を展開した経験をもつ。「みんな、ほめられたい、認めてもらいたいと思っているんだと気づいた」という。ほめて、認められるエイサー指導で、子どもたちから尊敬されている。「結局、自分の認めてもらえなかった中高校時代に、必死に寄り添っているんだね」という筆者の問いかけに、「それは無いでしょう、といいつつも、嬉しそうに、子ども達へのエイサー指導をしているTである」。

4) 内間青年会3人のインフォーマントに関するいくつかの特徴

KとA子は生まれた時からの内間人（ただし、両親の代からの内間人）。Tは、内間外から引越してきた人物。内間青年会では、内間外に住んでいる会員も多く、半数近くいる。それは、かつて、内間青年会が内間自治会に受け入れられないという問題を生み出した要因の一つになっていた（現在は克服されている）。また、中高校時代に「落ちこぼれ」の体験と非行体験を持ち、アルバイトやフリーターで経済生活をしのぐ体験を持つ男子青年が多い。定職を持たない、ないし持てないのである。ここには、沖縄の経済問題が大きく関わっている。これも内間青年会の特徴である。Tは、K氏の青年期に多くの部分で重なっているのである。

A子は、順調な高校時代、短大時代を過ごし、青年会でエイサーとその他の芸を修得、活動を通して地域との格闘を経験した。青年会のリーダーを体験する中で愛する人物と出会い、結婚し、幸せな家族生活を送る。このような点で、内間青年会を構成する女性のなかでは、典型的な人物である。内間青年会では、問題を抱える女子青年も少なくはないが、A子は内間青年会における女性リーダーの、ひとつの典型と

いっている。但し、そうした順調な歩みも、内間青年会での成長が、大きく支えになっていたことを指摘しておこう。

II. 青年の自立と生活世界としての内間青年会活動の意義

一内間青年会活動は、内間の青年達の自立に、どんな意義を持っていたか—

1. 地域に若者の「居場所」をつくり、子どもと青年が育ちあえる人間関係を創造する

Kが26・7歳の時、内間青年会をつくらうとしたのは、長女の出産が大きな契機となっている。その時に考えたことは、彼自身の子ども時代における字内間にあった密な人間関係と豊かな自然環境が崩壊の危機に直面していたことである。青年会をつくらうとしたのは、この子どもたちが育っていける内間をつくらなくてはならないとの自覚からであった。親の組織ではなく、青年会をつくったのである。それは、彼自身が青年であり、最も身近に感じられたのが青年会だったことであつたという。

この内間青年会をつくらうとする意識は、さらに次の2つの意識に支えられていた。1つは、集落が持っていた暖かく、懐かしい、小さい頃の思い出である。集落には、エイサーや芸能、そしてまつりもあつた。あの青年（「ニーセーター」）のお兄さん（「ニーニー」）やお姉さん（「ネーネー」）たちのエイサーや芸能の、輝かしかつたこと。自分も大きくなったらあのように活躍したい。その、こころ踊るような思い出である。そうした芸能を持つ集落の人々は、子どもにとって、誰からも話しかけられ、叱られる存在であり、暖かい人間関係のなかにある人々であった。そんな関係は、この内間に取り戻せないのだろうかと思考する意識である。（Kの証言略）2つは、自らの存在証明になるような人間関係や場を求めたことである。そこに集った8名の青年会員は、彼の高校時代からの友人も含めて様々だった。みんなこの内間でエイサーをやってみたいと考えていた青年男女であった。内間青年会発足の経緯では、自治会長が相談相手となっていたり、自治会主催

の「青年会発足激励会」が開かれるなど、PTA役員や地域の先輩層の人たちがKに力をかしてくれた。Kは言う。「自分達は、しかし、はみ出し者が多かったですから、公民館で酒を飲み始めたら、そういう青年会はいらないといわれましたよ。不良の集まりだってね。確かに一理ありますが、僕らは間違っていないかと思っっている。先生（筆者のこと）、青年会づくりの最初に、はみ出し者が公民館に集まっていたことが重要なんですよ、分かりますか。Dなどは、高校生でしたけれど、一緒に練習して、馬鹿騒ぎをして、酒も飲んで、いろいろ語りました。はじめは、真面目な連中は来なかったんですよ。彼らは高校生でしたけれど、一緒に酒飲ませてあげて。『そのかわり、エイサーをやろう』と言って、巻きこんだんですよ。エイサーが軌道に乗りはじめたら、真面目派がやって来るようになったんです」と。なるほど、不良が公民館に集まっていれば、酒を飲む程度以上の問題行動はとれないということなのだった。その酒飲みも、Kたち20歳以上の青年に管理されているわけなのだ。

2. Tにとっては、家庭崩壊と高校「落ちこぼれ」、非行から救われる居場所だった

ところで、内間青年会をつくろうというKの意識は、青年会に入ろうとする意識とも共通している。Tにとっては、彼の青年前期の危機を救ってもらったような内間青年会入会であった。彼の場合、両親の離婚と父の二度の離婚とは、このような経緯であった。

筆者「親父にも腹立ててるわけ」

T 「今はもうないんですけど。3歳の時に離婚して、その頃は全然、物心ついてるかついてないかぐらいで。お母さんと離れ離れになったのは悲しかったんですけど、でもその時、自分、じいさんばあさんと会ったの初めてだったんですよ。首里に行ったんですけど。じいさんばあさんの家に一緒に住んで。お母さんの代わりをおばあちゃんがやってくれて。淋しいっていう感覚がなかったんですよ。それよりも、おじいおばあに会えた事がうれしくて。で、その時に親父が、飲み屋の女

の人一人連れてきて、その人見た時に自分、お母さんだと思ったんですよ。そっくりで。自分なんか、なかなか人に懐かなかつたらしいんですけど、でもこの人には懐いた。でも飲み屋の人だった。で、その人に中学1年ぐらいまで育ててもらって。ま、それも一応、駄目だったんですけど。」

筆者「じゃあ、お父さん二度目の離婚するわけ。」

T 「はい。それからもうだいたい親父のこと恨んで。その育ての親が好きになったんですよ。とっても。本当のお母さんのように。だから産みの親ではないってことを知っているんだけど、もうとっても好きで、本当にお母ん（おかん）だと思ってたんですよ。たまにお母さんが悩んでる。

『なんで?』って聞いたら、『時々自分が本当にお母さんって思われてるかどうか自信がなくなる』って。飲んでる時にぼろっとね。これ聞いた時に、慰めるってわけじゃないけど『あなたはお母さんなんだよ。自分にとってお母さんなんだよ。』って言ったんだけど、結局別れたもんだから。こういうの辛いんだけどさ、親父けなすみたいで。だけどその時もまた親父には次の人がいて。遊びほうけてたの。ギャンブルばっかり行って、帰ってこなかったり。小学校低学年の頃は、それを出張に行ってるって聞かされてて、たまに帰ってくる時にお土産持ってて、それで完全に出張に行ってるって思われてて。だけど学年が上っていくにつれてこんな頻繁に出張ってありえないな一って。で、ちょっと調べてみたら女がいて。一気に怒りが込み上げてきて、親父に対して。大嫌いになっちゃったの。それからずっと認めてなくて、言うことも聞かなくなって。聞くのは母親のことだけ。だけどそれも結局離婚して。このやろう、親の勝手に別れやがって、と。それからどんどんこう、酒飲めるマチヤー（小さな商店）とか行くようになって。」

このマチヤーで、彼は内間青年会入会へのきっかけと出会っているのである。再度Tに説明してもらうことにしよう。

T 「うん。強一く覚えてる。まあ、見ての通りこれね。(ビール缶を持っている) お酒でした。先生(筆者)もよくご存知のBさん。自分もBさんと同じアパートのメンバーで。よく小さいマチャーにたむろしてたんだけど。たむろしてるっていうのは、まああまりよくないことなんだけど、タバコ吸ったり、お酒飲んだり、オートバイ乗ったり、ただ遊んでるような毎日だったんだけど。その時にBさんが来て、自分なんか『エイサーやってみないか?』『青年会やってみないか?』って。それがきっかけでした。」

「それで、エイサーってものをまず知らなくて、青年会ってもの自体もまだ知らなくて、地域に自治会があるってことすら知らなくて。それぐらいに何も興味持てなかったのね。で、その時に一緒にたまってるMとか、あと、あっちにいるYが自分より1コ下で、Mが1コ上で、この二人が先に入ったわけ。この二人も面白いとは言ってたんだけど、ホントかよーって感じ。なんで俺なんかと遊ばないのか、裏切り者って感じだったんだけど、でもやっぱりこれなんかからも楽しい楽しいっていうのを聞いてて。で、たまたまマチャーでいつも通りたまってたなら、その時一人だったの。で、なんか淋しいなって思ってる時に、この二人に誘われて入ったメンバーの一人がオートバイでパーと来て、『T、なにしてるか』って。で『ゆくってる』って。あ、ゆくってるっていうのは休んでるって意味なんだけどね。で、『じゃあ今公園で青年会の人と一緒に飲んでるから行かないか』って。で、すぐ飛びついたわけ。暇だし、なんかのきっかけになるかなーとちょっとは思いつつ。ま、これが、酒が飲めるっていうのが一番の魅力で。ただで飲めるよーラッキー!とか思いつながら、じゃあ行くー!って。そんな感じで青年会に入ったんでしたね。」

こうして、Tは青年前期に、①家庭からスポイルされ、②地域の青年会に自分の「居場所」を見出すという経緯を持っている。Tの青年前期は、成長や自立にとって家庭的な面で大きな困難をかかえたが、内間青年会との出会いと活動がこの困難を克服させているといえるのである。

以上の語りにもたよりに、Tの子ども期は、生みの母と父との離婚、父の二度目の離婚、ギャンブル、三度目の女性関係、などで、家庭崩壊状況のなかに置かれている。そして「大嫌いになっちゃった」父親との生活で(祖父母もいたが)、家庭を自分の居場所にできず、マチャーでたむろし、酒を飲んでいる状況にあった。興味深いのは、そのマチャーで所在なく酒に手を出していたTが、地域の青年会に誘われ、入会し、会員として定着していったことである。酒で釣ったようなところもあったが、むしろ、家庭からスポイルされ、後には高校(2年で中途退学)からもスポイルされた青年であったが、内間青年会には、そうした青年の傷ついたところを慰め、支ええる雰囲気や人間関係の豊かさがあつたといえるのである。まずは、Tを誘って内間青年会に惹きつけることのできた力量に注目したい。「居場所」を無くしている今日の子ども・青年像を考慮すれば、注目せざるをえないだろう。

Tにとっては、家庭や学校からスポイルされる状況に置かれていたことが、この当事の彼に重たい現実や自暴自棄なところを実感させていただろう。そこに現れたのが内間青年会であった。具体的には、彼にとっての地域の先輩たちであった。Tが感じた内間青年会の魅力は、地域の先輩との気さくな交わりであり、エイサーのすばらしさであった。まず、先輩との交わりについてTはこんなふう述べている。

T 「最初は怖かった。やっぱり地域の先輩だし、自分なんか中学校の大先輩にあたる人たちだし。だから怖いなのはあつたんだけど、話し聴いてたら、ぜんぜん楽しいし、面白いし、自分が描いていたものより、全然、あれー?っていう感じで。その頃俺は結構生意気で、口も悪くて、タメ口を利いたりもしたんだけど、先輩達はもうぜんぜんそれを大きい心でとらえてくれて、怒ったりしないで。時々は叱られることもあつたけど。友達として、仲間として、接してくれましたよ。」

「実は、自分も、最初は人間と、人と付き合うのあんまり好きじゃなかったから、溶け込めないだ

ろうと思ってただけど。先輩や他の青年会のメンバーと話してみても、あれ？、全然話しやすいって。全然、戸惑いはなかったんですよ。」

Tが内間青年会に定着していくにあたっては、この青年会がエイサーを取り組んでいたことが大きな意味を持つ。Tはこのように語っている。

T 「はじめは、酒が飲めるし、いい先輩がいるし、という感じでやっていた。始めの頃は、だから、飲むためにエイサーの練習していたようなもんです。それがいつの頃か分からないけれど、ハッと気づいたら、自分がエイサー好きになってた。お酒よりもエイサーが好きになってた。お酒のためじゃなくて、エイサーが踊りたかった。次の曲が覚えたい、次の曲が覚えたい。速く全部覚えたいって。で、自分がその時好きだったのが、「唐船どーい」っていう（エイサーの演舞の）一番最後の曲ね。かちゃーの曲なんだけど。それがとってまかつこよく見えて、先輩なんか踊ってるのがね。それで、自分より年若いMちゃんやRちゃんとかも踊ってる。先輩なんかこうして並んで踊ってる。自分より先に進んでる。何か悔しくなってる。ちくしょーと思って。絶対覚えてやる。追い越してやろうと。それからもうズルズル、気づいたら10年やっちゃってる。あれー？っ、みたいな。」

青年会の仲間と取り組むエイサーは、このように青年のころをひきつけて、熱中させるものがある。ここに至って、Tにとっては、家庭、学校からスポイルされた意識も、お酒と非行も、吹き飛んでしまい、Tの生活世界は、異年齢の青年集団とエイサー、そして青年会を通じた地域づくり活動によって占められていくこととなったのであった。

3. 青年にとっての芸の修得（継承）、熟達の意味

Kは勿論、A子にもTにとっても、エイサーや芸能の修得は、彼らの青年期の自立に大きな意味を与えてきた。まず①小さい頃からの憧れとしてのエイサー、そのエイサーを踊る技の習得であ

り、自己表現を通じた「生きがい」の獲得である。このことは、それぞれに次のように映っていた。

Kにとっては、内間青年会の発足と同時に、自分達青年の存在を認めてもらえるとりくみであった。そして、技の習得は、子どもたちへの技の伝承という形で、地域における青年による子育て活動の創造へと発展していることである（イニシエーションと社会参画活動）。

A子にとっては、みやらびエイサー（女性エイサー）・ティーモイ（手踊り）におけるヘーシ（はやし）の修得に象徴的に表れている。彼女によれば、もっとも厳しく教えてもらった内容は、ヘーシだったという。自らの地域と青年の心意気を示し、誇りを持って踊ることができるか否かは、ヘーシの大きさや精神に関わっているという。「なんでこんなに厳しく教えてもらわんといけんのけて、そう思っていたんですよ、でも、実際に内間のエイサーをつくっているときに、自分なんかのエイサーの誇りって、こんなにあるんだと思って。その気持ちを踊りとヘーシの心意気として体全体で表現することなんだなって理解したとき、厳しくされる意味が分かりました。」「それで、北谷町のガーエー（我栄）がありますが、これを見に行ったら、ヘーシーの大切さ、楽しさ、を感じて。その掛け声っていうのにひかれて。内間でも、とても重視してみんなに教えました。そしたら、その厳しく教えてくれた牧港の皆さんが、内間のティーモイはいいよ。ヘーシーがいいよって。……やっぱり、うれしかったんですよ、とてもね。」

ここにも表れているが、このような芸の修得と内間青年会での人間関係が、A子を積極的な女性へと変身させている。小学校時代のA子は、いじめられっこで静かな子だったという。しかし、同級生の誰もが不思議だというのが、積極的に快活な女性に変身したのだという。彼女は、「自分でも、びっくり。こんな人になるとは思わなかった」という。そして、この変身と内間青年会での活躍は、今日の幸せな結婚生活を生み出すご主人との出会いにとっての（彼のころを動かさせる）不可欠な条件だったと述べている。そ

の変身と努力は、内間青年会のなかで自然に培われたという性格のものであるが、実に、A子の結婚を通じた専業主婦としての自立を見通す重要な条件として、20歳代前半に彼女に身に付いた力量を形成していたのであった。

Tにとっては、技の向上は、自分を見切らない心をつくることであり、少しできるからといって自惚れる自分をおさえる力量の形成であった。そして、前向きな生きざまを獲得していく筋道であった。彼の証言を紹介していこう。

「うん、たまにやっぱり思い通りに行かない時とか、後輩がどうしてもまだ理解してくれないから。そういうときに投げたくなる事はある。もういいやって。でもそれだったら今までの自分と変わらないな。だって投げ出したら自分も進まないし、結局自分が見捨てたことになってしまうし、周りの人間を。そしたら周りも伸びないなって。そしたらここがなくなってしまうんじゃないかなって。青年会がなくなってしまうんじゃないかなって。自分ひとりじゃなくて、そういう考えが周りをそうさせないのかなって。」

「とにかく自分が一番になりたいっていうので、俺がやった事っていうのはかっこいい演技を求めた。かっこいい演技を求めすぎたばかりに結局うぬぼれていうことで落とされた。それでかっこいい演技っていうのを求めて、お客さんの反応っていうのは確実にもらえたわけ。踊った後にお客さんが来て、『一番かっこよかったです』って。そういう人が結構いっぱいいて、周りにそういわれる人はほとんどいなかった。ああ、じゃあ俺がやってること間違いじゃないなって。でもしばらくたった時に先輩に『お前基本から外れる』って。でもまだその時も自分は気づかなくて。なにくそって。自分が大きく踊れないからって、俺がこんなしてやってるからって妬みやがってって思ってしまった。完全にうぬぼれた状態で天狗になってしまっ。それで先輩にばちっと落とされた。」

この後、Tは、別の地域のエイサー指導にあたるが、基本ができていないため、さっぱり上手く

教えることのできない自分に、うちのめされている。芸の先輩をみつけては、「ここはどうだったっけ」と練習を続ける毎日が展開したのである。

このように、内間青年会の中心的な活動としてのエイサーや芸能(棒術や獅子舞など)の修得と熟達の課題追求があることが、青年に①生きがい観や生きる厳しさや②規範、③他者と共にとりくむ生活づくりにおける共感と共同の大切さ(100人が息を合わせて踊る、その技の獲得)を学ばせている。それは、精神的な自立、社会的自立に関わる力量の形成となっている。

4. 子どもが育つ、地域観と親の自覚の形成を生み出している(人生の見通し)

こんな大都会のなかで、字内間という集落に、これほどの愛着と地域観を形成できるのだろうか。これは、筆者の率直な感想である。Kは、沖縄の祖国復帰前、1960年代に生まれ、1970年代後半に展開した宅地造成以前の内間を知っている。まだ都会化しない自然環境のなかにあった内間の原風景を経験しているのである。「今の家の周りは、原野でしたよ。公園のところは林。バンジロウのありかは誰にも教えず、実が熟すのを楽しみにしていました。自然とどっぷりとつかりながら子ども時代を過ごしていましたよ。先生、沖縄には『じんぶん』という言葉がありますよね。じんぶんは、このような自然と関わって、自然から教わるものと、あと人間から教わるものがあるんですよ。」「自分が子どもの頃は、『ワッター村』があって、悪がき連で、徒党組んで遊んでいる姿を、いつでもみんながみていました。だから、隣のおじさんや、隣のニーニーも怖かったさーねー。他人ではないワッター村のみんなが、いつも、自分をみていましたよ。」「それらは、経験しないと分からない、自然から学ぶじんぶんとワッター村の人々から学ぶじんぶんだったと思っています。」「そういう暖かい温もりを早く取戻したいんですよ。」

それらと、祖父の田舎の読谷村で、毎年の夏に、いつも経験したエイサーの胸躍らした思い出と、シマ社会の豊かさの実感Kの原点になって

いよう。先にみたように、Kが青年会を復活させた大きな要因は、1990年、26歳時の長女の誕生にあった。この頃は、すでにKの原風景にある内間は存在していない。自然の取戻しは「決定的に」困難であった。だから、人間関係と内間の芸能を取戻すのだという。

このおもいは、内間を含む校区での子どもに関わる事件が発生し、これを防ぐことができなかつた後悔が拍車をかけている。実はこの校区では、地域の中学校で暴力事件や非行問題が比較的多く発生してきた。Kに限らず、内間青年会が地域の「子どもの健全育成」を青年会の目的の2番目に掲げて、子育ての取り組みを展開してきた理由はここにある。Kも、いくつかの事件発生に拘ってきた。例えば、1993年に、中学校で発生した集団暴行事件で中学生が亡くなっている。これに対してこう言うのだ。「自分達は青年会で、青少年の健全育成をすすめることを方針にして取り組んできたんですが。暴力事件での死亡をなぜ防げなかったんだろうかと思うんですよ。きっと、子ども会にも入れない子がいて、そこに目が行ききれなかったんだと思うんです。それが悔しいんです。地域に人間関係が出来ていれば、彼らを救えたんだと思うんですよ。だから、『ワッター村』、みんなの包容力が寄せ合ったムラ。それを早く取戻したいんですよ」と。集団暴行事件はここ数年でも、2002年4月と03年2月にも発生している。これへの取り組みの様子は後に6で紹介することにしよう。さらには、近くの安謝川で溺れかけた子どもの事件も発生したが、これについても、Kたちは、子ども集団を十分に組織してあげられなかったことや地域の安全な遊び環境づくりをできなかったことを、自分達内間青年会の取り組みの弱さとして受け止めてきた。Kは言う。「だから、エイサーを子ども達に教えながら、子どもを育てて、守ってあげられる取り組みをやっていこうと、みんなと語りました。子ども会指導を熱心にやっているOさんとも、一緒に、子どもを育てる取り組みをやっていこうと語ったんですよ」と。

筆者は、Kがこのように言っているのを、上辺だけの話ではないのかと捉えていた頃があった。

しかし、ここ10年間、内間にしばしば通い、青年たちの子どもエイサーのとりくみや青年会のたまり場にやってくる子ども達と交流してきて、彼らの真実のおもいであることを理解してきた。このような語りの後にKは、次のように彼の想いを語った。「いま流行の石垣出身のビギンというグループがあるでしょう。あれも、子どもの頃から、ずーと、三線（さんしん）片手にやってきたんですよ。石垣の彼らの『生まれ島（生まれ育ったシマ）』が、今の彼らをつくったんですよ。内間も同じです。人であり、芸能であり、内間には、それがあつた。ワッター村。内間青年会。自分は、ここにいるんだという誇り、その気持ち。取り組みをやっていくなかで、それを感じた人間は継続していくことができる。感じない者は去っていく」。「みんなの包容力を寄せ合ったものが『ワッター村』。それを、早く取戻したいんですよ」。「それで、まだまだ、その域には達成していません。次のステップは、内間の伝統芸能や棒術を広げる。そして、芸能を中心とした人間関係が豊かになっている状況をつくる」。「内間の芸能が核になって人間関係が展開すると、以前の本当の内間、『ワッター村』、を再現できるんですよ」と。

Kにあつては、子どもが育つことのできる地域観と地域の将来像が、親のおもいに支えられて、以上のように形成されている。

このような地域意識、子ども組織観は、内間青年会で自立し、親になっていった会員に多くみられることである。A子も同様で、次のように述べている。「私は青年会で変わった人間ですし、自分達ですべてつくってきたことが大切だと思ってきました。ですから、自分の子ども達にも子どもが主役の自由な取り組みで育てて欲しい。Kは、自分達が『地域で、子どもに何を残せるか』とよく言います。私も胸張って渡せる地域を子どもに与えたいんです。私は、地域のことが好きで、どんなことでも苦にも思いません。人と関わることも楽しい自分がいます。青年会始めのころとは逆ですけどね。それで、子ども達を中心に、子どもが何をやりたいかっていう気持ちを引き出せる、子どもなんか自分が自分でこれをやりたい、自分なん

かで、こういうふうに構図を建てていったんだよ、そういう子ども達の気持ちを引き出せるような会をつくりたい。子どもの個性や主体性を引き出すことの出来る親の会をつくりたいと思っています。誰かが勝手に与えるようなことのない、自由な環境のなかで、子どもたちと一緒にやっていきたいと思っています」と。

内間青年会の取り組みは、地域で子どもが育っていくことのできる地域像や、主体的な子ども活動のイメージと子ども像、これを支える親の役割の自覚を生み出しているといえよう。それは、地域社会の将来像を構想する際のおおきな要素の一つである。

(下に続く)

注)

- 1) 詳細な人口統計は、2000年12月末で、浦添市104,308人、内間9,155人である。

資料1 K氏の生活歴

0. 父は、読谷村出身、警察官（交通課）、現在65歳

母は、伊平屋出身

（妻の母は、渡嘉敷村出身。父は名護市源河出身 妻21歳の時に亡。）

現在、妻（39歳）と、長女（中1年）、次女（小6年）、三女（5歳）

1. 学歴

1963年 10月8日 浦添市内間に生まれる

70年 神森小学校入学

76年 神森中学校入学

79年 O高校に入学

2. 職歴 生活歴

1982年（18歳） 大阪中之島のレストランAに入職（6年半）

*叔父が大阪で、和食の調理人で、紹介してもらった。

*調理師免許に3回目の国家試験で合格。

88年（24歳半ば） 沖縄県内間に帰郷

沖縄Sホテル（北中城村）の調理師

（半年でホテルが廃業する）

89年（25歳） 北谷町のレストランAの調理師（1年）

1990年（26歳） 友人5人による洋食屋を字宮城にオープン。（3年弱で廃業）

*後に妻となる女性と字宮城の店に同棲 長女出産

91年（27歳） 妻と結婚

92年（28歳） 洋食屋廃業 水産加工業勤務

夫婦と長女で内間の実家に引越し 現住所へ

2女誕生

5月 内間青年会結成 会長

93年（29歳）

94年（30歳） 職なし＝プータロウ

95年（31歳） 沖青協会長＝専従職

96年（32歳） 沖青協退任し、土建業勤務

1月 沖青協青研に参加
沖青協の常任理事
沖青協会長就任
沖青協会長退任

*この頃、2級土木施行管理技師の免許取得

8月 大名でガーエー実施

98年（34歳） 半ばに土建業をやめて、半年プータロー 3女誕生

**自分は、いったい何をして生きていこうとしているのか、悩む！。

**青年にいろいろ生き方や青年会論を語るわりには、自分が不明の状態。

99年（35歳） ～学習教材のセールスや化粧品セールスで日銭を稼ぐ

2000年（36歳） 大平のレストランに入職 調理師

（経営がうまくいかない）。

出向で、飲食店K屋（松山から西原へ）で調理師修行。

**大変きつく、苦しかったが（以前のKなら絶対に辞めていたという）、

歯をくいしばって頑張った。結果、副料理長級にまで昇格。

01年（37歳）

10周年記念大綱引き盛況

**飲食店K屋の部長が新規事業展開の際に一緒に現在の飲食店Sへ移行。

03年10月で40歳。